

## 言語的多様性に対するひとびとの意識

——レラ・ボロディツキー氏による「言語はいかに我々の考えを形作るのか」に対するコメントを一例として——

鷹取勇希

### 1. はじめに

本稿で着目する「言語的多様性」の背景には、言語的・文化的多様性（以下、「多様性」）に関する議論がある。それは、2001年11月におこなわれた第31回ユネスコ総会における「文化的多様性に関する世界宣言」を代表的な指針として、現在でもさまざまに議論されている。「文化的多様性に関する」という文言ではあるものの、ここでは文化の持続可能性における言語の重要性についても言及されており、言語と文化が不可分の関係にあることが示されている。昨今のグローバル化は、言語や文化を画一化する動きであると語られる一方、他方では「多様性」に対する意識を芽生えさせる“きっかけ”となるというような指摘もある。たとえば、ロバートソン（1997）は、グローバル化について次のように述べる。グローバル化は、「今日有力な、もし放置しておく、世界を同質化し、個別性を抹消してしまう過程」というよりも、「本質的かつ内在的に個別主義を推進するという見方、したがって、グローバルに多様性を推進するという見方」（p.5）である。そして、グローバル化によって「諸社会が、相互にますます狭く『圧縮』される時に、それらのリーダーたちは、個別の社会と地域の独自性を確立する必要性を感じる」（pp.13-14）としている。

また、「帝国主義」の概念を文化の支配的性格に応用したトムリンソンは、「西洋の先進諸国、とりわけアメリカの文化が第三世界の文化を支配する状況」を「文化帝国主義」とよび（片岡、1993, p.376）、この概念に対する考え方の根底にあるものを文化の多元主義とした。彼は「多元主義」を次のように説明している。「ある集合体に固有の生活様式を『ひとつの文化』として捉えることによって多元主義は生まれてくる（中略）つまり、『いかに生きるか』という問題は、この文化を所有している特定の集合体が判断すべきものであり、他のどんな集合体によっても判断されるべきではない、という考え方である」。そして、「文化帝国主義に対して唱えられる異議の多くは、『生活様式』の多元性を尊重することの自由主義的価値をその暗黙の根拠としている」のである（トムリンソン、1993, p.21）。

これらは氷山の一角であるが、グローバル化が進むことで、自らの言語保持、国際的には多言語指向が生じ、「効率的な国際コミュニケーションが重視される一方で、それとは逆に『こ

とば』への国民的・民族的な誇りや絆が注目されている」(片桐, 2008, pp. 165-166)と考えることもできるだろう。宮永(2000)の言葉を借りれば、「統合という作用が、反統合という反作用を生む」(p. 20)状態である。人間にとっての言語や文化とは個にとっての「核」となる重要な要素の一つであり、己のアイデンティティを保持しつづけるために必要となる要素である。ここで示したものは一例であり、他にも「多様性」保持の必要性や、少数言語、少数文化の消滅と保持に関する議論は枚挙に暇がない。

ここで問題となるのが、近代化を経てグローバル化のなかにある諸社会集団や共同体が、自らの「核」としての言語や文化についてどのような考えをもち、どのようにそれらを保持するかという点である。「多様性」の観点からこの問題を考えれば、少数言語や少数文化における現在の課題は、いかにしてその重要性を認識し、その「多様性」を保持していくかということである。

本稿が指摘する点はどこにある。本稿では、グローバル化する社会において「リング・フランカ」として存在する英語に対して、消滅の危機に瀕している言語的多様性の存続の問題に注目する。とくに、英語が広く受容されるなか、言語的多様性の在り方に対するひとつの意識や考えに焦点をあてる。そのため、本稿では「TED Talks」<sup>1)</sup>(以下、TED)において発表されたプレゼンテーション(以下、プレゼン)をとりあげ、そこに寄せられるコメントを一例とする。一般のひとつの意識に着目し、さまざまな考えや意見、見識を言語的多様性保持の観点から分析する。

まず、本稿でとりあげるプレゼンの概要を紹介する。次に、プレゼンの内容を受けて寄せられた意見を言語的多様性保持の観点から考察する。とくに、各プレゼンに付随する掲示板に自らの意見やコメントを寄せるひとつが言語的多様性に対してどのような考えや意識をもっているかという点から、それらのコメントをひろいあげる。そして、さまざまな意見やコメントから言語的多様性の存続可能性を検討し、本稿のまとめをおこなう<sup>2)</sup>。

## 2. レラ・ポロディツキー氏による「言語はいかに我々の考えを形作るのか」

本稿においてとりあげるプレゼンは、認知科学者レラ・ポロディツキー氏によるものである。同プレゼンは、「言語はいかに我々の考えを形作るのか」(原題は“*How language shapes the way we think*”)という題目のもと、2017年11月に発表されたものである。現在の再生回数は420万回を超え、29の言語で翻訳されている。およそ14分間のプレゼンのなかで、彼女は認知科学の立場からさまざまな言語に特有の表現方法をひきあいだしつつ、言語的多様性の意義を説く<sup>3)</sup>。とくに、彼女は以下の言語を例として挙げ、それらの言語に特有とされる表現方法に言及している。

- (1) クウク・サアヨッレ族(オーストラリアのアボリジニ)における“方角”
- (2) ロシア語における“青色”
- (3) ドイツ語やスペイン語における“文法的性”
- (4) 言語における“出来事”の描写方法

まず彼女が紹介するのは、オーストラリアのアボリジニ、とくにクウク・サアヨッレ族における方角の表現方法である。クウク・サアヨッレ族は、ヨーク岬半島の西端であるポーンプラーウに住む部族である。この部族が話す言語は、文字どおり「クウク・サアヨッレ語」という言語であるが、この言語における興味深い点は、“左”や“右”という言い方をしないことである。つまり、左や右という言葉を用いない代わりに、さまざまなことを“東西南北”四つの方角で表現するという。彼女は、この部族においてはあらゆることが東西南北で表現されるとし、たとえば、「あら、南西の脚にアリがいるわよ」あるいは「コップを少し北北東にずらして」などというと述べる。また、あいさつなどをする際も、この部族では「どちらの方に行くの?」と聞き、それに対して「ちょっと北北東の方へ」と答えるという。

また、彼女によれば、クウク・サアヨッレ族は左と右という表現を用いないため、時間の考え方にも違いが現れるという。たとえば、古い写真から新しい写真へと並べる場合、英語話者の場合はたいてい左から右へ並べるという。しかし、この部族の場合、自らが南に向いているときは左から右へと並べ、北に向いているときは右から左へと並べるのである。そして、東に向いているときは“向こう”から“手前”へ並べることから、この部族における時間軸は東から西であると結論づけられている。つまり、部族のひとびとにとって、時間の向きは「自分の身体に対応したもの」あるいは“自己中心的なもの”ではなく、「大地に対応したもの」なのである。

次に、彼女は言語による色の見分け方の違い、視覚的な世界の違いを説明する。たとえば、ロシア語では同じ“青色”でも、“薄い青”と“濃い青”を“goluboy”と“sinii”という言葉で区別するという。そして、この区別は脳の働きにも作用するとし、ロシア語話者はこの「言語的な境界」を越えると青色の差異に素早く反応することができるという。

言語における表現の差異は、“文法的性”にもみられる。彼女はドイツ語とスペイン語における“性”を例にとり、太陽はドイツ語では女性名詞として、スペイン語では男性名詞として表現されるという。月はその逆であり、この区別が人の考え方に影響を及ぼすと述べている。たとえば、“橋”は文法上ドイツ語では女性名詞として、スペイン語では男性名詞として扱われるが、それぞれの言語で橋を形容する際の言葉が異なるという。つまり、ドイツ語話者は“美しい”や“優雅”という「女性的な言葉」を用いるのに対し、スペイン語話者は“力強い”や“長い”といった「男性的な言葉」を用いる傾向があるというのである。

最後に彼女が紹介するのは、“出来事”の描写方法の違いである。ここでは、スペイン語と英語が例として挙げられている。たとえば、“ある人物が写っており、その人物の臀部が壺にあたり、その壺が今にも台から地面に落ちて壊れそうな状況”を写した写真の出来事を描写する場合、一般的に英語では「彼は壺を壊した」という表現をするのに対し、スペイン語では「壺が壊れた」という表現を用いるのだという。つまり、スペイン語では、「誰がその行為をおこなったか」あるいは「誰がその出来事のきっかけとなったか」ということはあまり関係なく、事故であれば誰がやったことなのかということとは関与しないのである。

彼女によれば、ここで問題となるのが「現実の結果」である。つまり、異なる言語を用いる人は、注意を向ける点が異なっており、このことは言語によって注意を向ける部分が異なっ

いることに起因するのである。したがって、たとえ同じ出来事を目撃したとしても、その描写方法が異なっているため、英語話者とスペイン語話者では英語話者のほうが“誰がやったのか”ということより覚えていたのである。逆に、それが事故であれば、スペイン語話者は「それは事故であったかどうか」あるいは「意図的におこなわれたものかどうか」ということをよりよく記憶しているはずである。つまり、たとえ同じ出来事や同じ犯罪を目撃したとしても、異なる話者によって“記憶している内容”が異なるのである。

これらの例を挙げ、彼女はプレゼンの最後に言語的多様性について印象的な言葉を残している。

言語の多様性が素晴らしいのは、人の心がいかに巧みで柔軟かを明らかにするからである。人間の精神は認知的な宇宙の一つではなく七千も生み出している。世界には七千の言語があり、もっと作ることもできる。言語は生きているものであり、必要に応じて磨きをかけ、変えていけるものである。残念なことに、私たちはこの言語的多様性を失いつつある。週に一つの言語が失われており、今後百年間で世界の言語の半数が失われるとみられている。さらに問題なのは、現在の人間の心や脳についての知見の多くが、英語話者のアメリカ人学部生を被験者にした研究に基づいていることであり、これは人類のほとんどが除外されていることを意味する。人間の心について分かっていることは、実のところ非常に狭く偏ったものであり、科学はもっと良い仕事をする必要がある。

プレゼンでは、異なる言語を用いるひとびとがどのように異なった考え方をもっているか、ということに着目している。さらに彼女が重要視していることは、他人がどのように考えるかということよりもむしろ自分がどう考えるかということであり、自分の用いる言語が自分の思考体系や思考方法にどのように影響しているかということである。彼女が、言語的多様性についてその重要性をさまざまな例から説いているように、異なる言語を用いるひとびとは異なる思考体系や表現方法をもっており、その“豊かさ”こそが、言語的多様性を保持する必要性についての骨格を形成しているのである。

### 3. プレゼンに寄せられたコメントの分析

本稿において調査対象となるデータは、レラ・ボロディツキー氏による「言語はいかに我々の考えを形作るのか」というプレゼンに対して寄せられたコメント97件である<sup>4)</sup>。本稿でとくに注目するのは、言語的多様性あるいは言語的表現の“豊かさ”に対する擁護の意識が表れていると思われるコメントである。また、彼女のプレゼンの大部分を占めている内容は言語と思考の関係性であるため、その関係性について多少なりとも言及しているコメントや、言語的多様性を批判的にとらえているコメントも交えて紹介する。

まず、言語そのものについて言及したコメントがある。そこでは、レラ氏によるプレゼンの内容を多少批判的にとらえたものも含まれている。

## &lt;コメント1&gt;

これはなかなか難しいトピックです！とても興味深く、知的なプレゼンに感謝します。言語は私たちが考えていることを説明するために使われます。言語は私たちが考えていることを表現するために使われます。私たちが使う言語は、その複雑さから私たちに混乱させることもあります。私たちが言語を使ってなにかを表現しようとするとき、間違っ言葉や逆の意味の言葉を使うがために、ひとりよがりになることもあります。しかし、私たちが使う言語は自らの考えを表現するためのものであり、考えることをおこなう人ではありません。言語は私たちが考えるためのプロセスなどではありませんが、もちろん私があなたになにかを説明する際には（芸術や科学など）なんらかの“言語”を使うのです。

(L.D)

LDが寄せたコメント1では、言語は「人が考えていることを説明するためのもの」あるいは「人が考えていることを表現するためのもの」とされる。プレゼンの全体を構成する基本的な考え方に鑑みれば、同コメントにおける言語に対する考え方はレラ氏のそれと重なる部分がある。しかし、同コメントの後半部分に目を移すと、L.Dは「言語は人間の思考を形成する基盤である」という主張を懐疑的にとらえているようにも思える。つまり、L.Dがもつ根源的な考え方に鑑みれば、この批判的な考えの基礎にあるものが「言語=思考を形成するプロセス」ではなく、「言語=なにかを表現するための手段」であるということがわかる。この意味において、たとえそれが芸術や科学などのいわゆる言葉をともしなわなない“非言語的なもの”であっても、「なんらかのことを表現し、説明する」という意味において、それらが“言語的なもの”としてとらえられているのである。

次に、自らがおかれている実際の言語の環境を述べているコメントがある。たとえば、T.Nはアオテアロア（ニュージーランド）の先住民であるマオリ族であり、そこで伝えられることわざ（言い伝え）とともに、言語に対する自らの考えを表現している。

## &lt;コメント2&gt;

われわれマオリ族は、アオテアロア（ニュージーランド）の先住民であり、“whakatauki”とよばれる、ことわざのようなものがあります。それは、「Mā te reo ka mōhiotia koe he tangata」ということわざで、「言語をとおしてあなたは人となる」、あるいは「あなたに自らのアイデンティティを与えるものこそ言語である」という意味です。(T.N)

このコメント2では、「Mā te reo ka mōhiotia koe he tangata」ということわざが紹介されている。T.Nによれば、マオリ語では「言語をとおしてあなたは人となる」、あるいは「あなたに自らのアイデンティティを与えるものこそ言語である」という意味をもっており、マオリ族にとって言語がもつ意味をうかがい知ることができる。すなわち、マオリ族の考えでは、人間を人間たらしめるものこそが言語であり、言語こそが個人のアイデンティティの基盤を成しているのである。



TNによるコメントのほかにも、タイ東北部で話されているというクメール語の話者であるA.Tによるコメントもある。そこではクメール語の未来について次のように書かれている。

<コメント3>

私は生まれながらにタイ東北部のいくつかの地方で話されている方言であるクメール語を話します。私は、村の私の家族や友だちと日々意思疎通しながらこの言語を学んできました。この言語の珍しいところは、書き言葉が無いということで、そのため私たちは読み書きができません。この言語は学校で教えられることはありません。われわれよりも若い世代はタイ語を話すので、私は自分の方言が近いうちに失われてしまうのではないかと思います。(A.T)

A.Tが寄せたこのコメント3から、タイにおける言語の現状が垣間みえる。A.Tは、タイ東北部で話されているというクメール語を話す。この言語は書き言葉がなく、また学校で教えられることもないため、A.Tはこの言語の読み書きができないという。クメール語は日常生活で音声言語として使われ、ある意味で口承伝達という形式で伝えられている。たとえそれがアーカイブの目的であっても、言語を残すためにはなんらかのかたちで記述しておく必要がある。そのため、仮に日常の場で使われなくなり話者がいなくなった場合、クメール語自体の存続が危ぶまれることになる。クメール語存続に関する危惧はA.Tもコメントで述べているとおりであり、少数言語がしっかりと次世代へと受け継がれていく必要性が現れている。

また、より一般的な立場から、“人間にとっての言語”の在り方を危惧していると思われるコメントもみられる。たとえば、以下のようなコメントである。

<コメント4>

すばらしいプレゼンです！レラさんは信じられないほど複雑なトピックをシンプルに説明しています。だいぶ前に、私の中国人の彼女が、中国語よりも英語のほうがその本質的にはるかに詩的であるということをお教えました。ソフトウェアや翻訳の仕事を経験したので、レラさんが言っていた考え方の多くを理解できます。この意味で考えると、英語は論理をくみためるため、あるいは法律の場面でもっとも表現力のある言語だと思えます。私はこれが良いことなのかどうかはわかりません。このことは国際的な商業の場においては良いことだと思いますが、おそらく人類にとってはあまり良くないことだと思います。(C.M)

コメント4において、C.Mは自身の背景から、英語について「論理をくみためるため」あるいは「法律の場面」でもっとも表現力のある言語だと述べている。その一方で、このことは「国際的な商業の場」では良いかもしれないが、「人類にとってはあまり良くないのではないか」としている。英語がどのような意味で「あまり良くない」のか、その詳しい理由はここでは書かれていない。あくまで推察の域をでないものの、その理由はおそらく言語的に英語とい

う一つの言語に集約されていくことであり、C.Mはこの点に対する危惧を示しているのではないだろうか。

言語がある一つのものに集約されていってしまうこと、あるいは「言語の画一化」という点について、次のようなコメントもみられる。

#### <コメント5>

レラさんは物事の裏側についてなにも語ることなく、それをとても当然のように言っています。言語は転換の原因となるだけではなく、統一や結束をもたらすものでもあります。そして、世界共通のリング・フランカがあるということは理解の不一致を減らし、より多くの平和をもたらしてくれる可能性があります。しかし、それは根拠のない議論です。お互いに自らの母語を用いたとき、どれほど理解の不一致があったでしょうか？さまざまな言語とそれら多くの語源に関する説明や研究は価値のあるものであり、私たちの歴史の重要な部分です。次世代にかけて、それらの多くを失ってしまうことは避けられないと思います。しかし、私の直感的に、この減少はしばらくすれば落ち着いてくると考えています。(D.L)

D.Lが寄せたコメント5の前半部分は、言語的多様性に対してある種批判的なコメント（「リング・フランカ」の有益性を主張するコメント）である。そこで、言語は「分断」の原因となるものであると同時に、「統一」または「結束」をもたらすものでもあるとされる。言語的多様性と言語の画一化を考えた場合、一方で言語的多様性はある種の「分断」を生じさせるものと考えることができる。他方、「リング・フランカ」によってもたらされる言語の画一化は、理解の不一致を減らし、われわれの意思疎通を容易にし、より「多くの平和」をもたらすものである。しかしながら、D.Lは同時に「さまざまな言語とそれら多くの語源に関する説明や研究は価値のあるものであり、私たちの歴史の重要な部分」と述べている。つまり、ここでは、「世界共通語」の存在が認められている一方、他方ではさまざまな言語に対してある程度の認識が示されていることがわかる。

このように、本稿で注目したプレゼンに対するコメントを寄せるひとびとは、多少なりとも言語に対して意識していることがわかる。本稿でとりあげたコメントから、その「程度」に差はあるものの、概して言語は人間にとって必要なものであるという認識が現れている。漠然と言語を大切なものとしてとらえる者もいれば、なかには具体的に自らの言語的な状況を例に出してその重要性を語る者もいるのである。

#### 4. おわりに—言語的多様性の存続の可能性—

本稿では、「言語的多様性に対するひとびとの意識—レラ・ボロディツキー氏による「言語はいかに我々の考えを形作るのか」に対するコメントを一例として—」と題して、言語的多様性に対してひとびとがもつ意識を検討した。本稿のまとめとして、それらの意識から言語的多

様性存続の可能性を検討する。

本稿で着目したプレゼンに対するコメントのうち、その多くは言語と思考の関係性について言及したものである。また、コメントのうち一部は言語的多様性を保持することの有益性について述べられたものもみられ、言語的多様性に対するひとびとの意識が感じられるものもみられた。言語的多様性の擁護に関するコメントがみられる一方、他方でそれをある種批判的にとらえるものがみられたのも事実である。

本稿でとりあげたプレゼンやコメントにおいても多少言及されているように、その大きさや規模を問わず、各集団がもつ言語やそれに付随する文化的志向性は自らのアイデンティティ形成の一端を担う重要な要素である。自己とアイデンティティの関係について、コメントのなかでもマオリ語やクメール語に言及したものがみられた。

それに対して、言語的多様性の保持における「リング・フランカ」や「世界共通語」の存在は脅威である。コメント5でもみたように、「相互理解」や「統一」のための言語の画一化は、ともすれば言語の消滅をひきおこしかねない。とくに、昨今のグローバル化において、英語はあらゆる場面でさまざまな理由をともなって必要とされることが多い。その際、英語はたんに“有益なもの”であるとされて受け入れられる。たとえば、国益を上げるために英語を受容して他の国々とやりとりをするため、あるいは科学・技術の発展をめざす際に英語が必然的にともなう場合、または文化的な要因ともあいまってその“響き”や“英語表記”にある種の“憧れ”をいだく状況などである。

言語や文化がひとびとのアイデンティティの「核」を成す構成物である点に鑑みれば、「多様性」を尊重することは、多様な人間の存在を保障することを意味している。グローバル化の名のもとで、英語に対して傾倒を続けることや、とくにアメリカ文化を中心とする欧米文化を憧れとともに受け入れ続けることは、小規模での「核」を消滅に導く危険性がある。そして、少数言語や少数文化の小規模な消滅は、延いては大規模な「多様性」の消滅につながる可能性がある。このような点において、トムリンソン (1993) は「グローバリゼーションにはあらゆる国民国家の文化的一貫性を弱める効果」(p. 342) があると述べ、Urry (1989) もまた、「経済的、社会的、政治的な関係性における『グローバリゼーション』が進行している。そして、それらは個々の社会の一貫性や全体性や統一性を弱体化させるものである」(p. 97) と警告しているのである。

英語が世界的に広まっている状況を考えるとき、われわれはその受容の「程度」を考える必要がある。つまり、自らがもつ言語や文化は自己のアイデンティティにおける重要な「核」の一つであると認識することが重要である。そして、このことは自己の言語や文化だけでなく、他者の言語や文化にもあてはまる。自らがもつ「自言語」や「自文化」のみならず、「他言語」や「他文化」の重要性も認識し、それらを尊重することによって「多様性」の保持が可能となるのではないだろうか。

#### 参考文献

片岡信. (1993). 「訳者あとがき」. 『文化帝国主義』. ジョン・トムリンソン著. 片岡信訳. 青土



- 社.
- 片桐薫. (2008). 『グラムシとわれわれの時代』. 論創社.
- ジョン・トムリンソン. (1993). 『文化帝国主義』. 片岡信訳. 青土社.
- ローランド・ロバートソン. (1997). 『グローバリゼーション』. 阿部美哉訳. 東京大学出版会.
- 宮永國子. (2000). 『グローバル化とアイデンティティ』. 世界思想社.
- Boroditsky, L. (November, 2017). *Lera Boroditsky: How language shapes the way we think* [Video file], from [https://www.ted.com/talks/lera\\_boroditsky\\_how\\_language\\_shapes\\_the\\_way\\_we\\_think](https://www.ted.com/talks/lera_boroditsky_how_language_shapes_the_way_we_think)
- Sapir, E. (1921). *Language: An Introduction to the Study of Speech*. NY: Harcourt, Brace and Company.
- Sapir, E. (1949). The Status of Linguistics as a Science. In D. G. Mandelbaum (Ed.), *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture, and Personality* (pp. 160-66). Berkeley, CA: University of California Press. (Reprinted from *Language*, 1929, 5, 207-14).
- Whorf, B. L. (1956). Science and Linguistics. In Carroll, J. B. (Ed.), *Language, Thought, and Reality. Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. (pp. 207-219). Cambridge, MA: The M.I.T. Press. (Reprinted from *Technology Review*, 42: 229-231, 247-248).
- Urry, J. (1989). The End of Organised Capitalism. In Hall, S & Jacques, M. (Eds.), *New Times: the Changing Face of Politics in the 1990s*. London, UK: Lawrence and Wishart.
- 鷹取勇希. (2018). 「言語的・文化的多様性に対するひとびとの意識—「TED Talks」におけるコメントの分析を一例として—」. 『比較文明』. pp. 157-187.

#### 注

- 1) TED Talks とは、分野を問わず、さまざまな物事について幅広い観点から発表がおこなわれるプレゼンテーションの場である。
- 2) 本稿は、鷹取 (2018) において注目したプレゼン以後に発表されたプレゼンを基礎としている。紙面の都合上、「多様性」に関するさまざまな議論や基本的な研究方法論については同拙著を参照のこと。
- 3) この類の研究の先駆的なものとして挙げられるのが「サピア=ウォーフの仮説」である。本稿で言及したボロディツキー氏による例のほかにも、サピアおよびウォーフによって、ホビ族やエスキモーにおける特有の言語表現が研究されている。詳しくは、Sapir, E. (1921), Sapir, E. (1949), Whorf, B. L. (1956)などを参照のこと。
- 4) コメント数は、2018年11月現在のものである。なお、ひとびとから寄せられたコメントは総じて英語であるが、本稿ではなるべくその意味を失わないように注意し、必要に応じて言葉を補いながら筆者自身によって訳したものを付している。